

応急仮設住宅におけるコミュニティの研究・提案

～ 子供のための遊具提案 ～

インテリア 柴崎ゼミ A2201107 荻野 園子

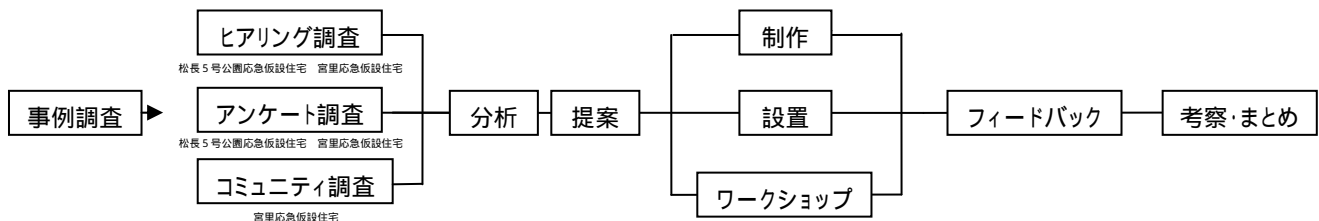
研究の背景・目的

2011年3月11日に起きた東日本大震災によって、避難生活を余儀なくされ、応急仮設住宅での窮屈な生活を強いられている人々がたくさんいる。仮設住宅での生活が長引き、心の問題も深刻になっていく中で、子供たちもストレスを抱えている。狭く騒音が響いてしまう仮設住宅の中では、子供は十分に遊ぶことができない。仮設住宅において、子供のストレス軽減対策の場となるような遊び場・遊具を設けることで子供を軸としたコミュニティ形成が行えるようにする。また、これにより学年を超えた子供たちのコミュニケーションが生まれることも期待する。さらに、子供たちの楽しそうな様子を高齢者の方が見に来て元気をもったり、子供たちを見守る保護者の情報交換の場としての活用も検討する。

研究の内容

- ・仮設住宅に入居して生活をしている子供とその保護者の現状を調査する
- ・子供の遊びに関する事柄に重点をおいて調査する
- ・結果から現在の問題点を抽出し、それを改善できるような提案を考え取り入れていく

研究方法



調査結果・分析

ヒアリング調査

キッズカレッジに参加していた子供へのヒアリング調査によって、仮設住宅で生活する子供たちは、遊具などが近くに無いため自分たちでルールをつくって遊んでいるということが分かった。仮設住宅における遊び場・遊具はニーズがあると言える。

また、会津若松市にある松長5号公園仮設住宅団地(大熊町)でのヒアリング調査によって、仮設住宅ごとに子供の人数にバラつきがあることが分かった。この仮設住宅は住宅の戸数自体が少なく子供の人数も少ないため、子供の遊びに対する配慮が希薄になっているが、やはり子供の遊びや生活を重視することも大切だと考えられる。遊具は場所をとるので無いほうが良いということであったが、近くにある松長近隣公園仮設住宅団地(大熊町)の子供たちとの交流ができるようなイベントを取り入れていくなどの工夫が必要である。

次に、会津美里町にある宮里仮設住宅団地(榎葉町)でのヒアリング調査では「宮里ふれあい館」という児童館を訪れることによって、遊具設置を希望する声を聞くことができた。この時点で宮里仮設住宅団地に遊具を設置することに決定し、調査を進めることにした。冬でも利用ができるよう室内遊具を提案・設置し、現在は毎日10人以下である児童館の利用を増やせるようにしたいと考えた。



* キッズカレッジでのヒアリングの様子

アンケート調査

松長5号公園仮設住宅団地と宮里仮設住宅団地に入居している小学6年生以下の子供とその保護者を対象に、子供の遊びに関するアンケート調査を行った。松長5号公園仮設住宅団地では記述式、宮里仮設住宅団地では選択式を中心とした記入方法で回答していただいた。

松長5号公園仮設住宅団地では、小学3年生の子供一人とその保護者に回答していただくことができた。保護者の方は、「この仮設住宅は子供が少なく外で遊ぶ機会があまりない、子供は一人で遊ぶことが多い」ということを気にされていた。「普段はゲーム・本・テレビ・自転車・縄跳びをして遊んでいる」という子供の回答からも、一人遊びが多いということが推測できる。また、「避難前は家の敷地が広く伸び伸びと遊ぶことができたが、今はできない」ということが避難前と避難後の変化として挙げられた。



* アンケート回答例

宮里仮設住宅団地では、26人の子供と27人の保護者に回答していただくことができた。まず、「遊びに関して気にかかっていることはありますか」という質問に対して「ある」と回答した保護者は27人中21人と、とても多かった。その理由として多く挙げられたの

は、「一緒に遊ぶ友達がいない」ということ、「遊ぶ場所がない」ということだった。また、「宮里ふれあい館」を週にどのくらい利用していますか」という質問に対して、「利用していない」と回答した保護者が20人であり、ほとんどの子供が利用していないことが分かった。保護者は「一緒に遊ぶ友達がいない」「遊ぶ場所がない」ということを心配しているのに対し、「宮里ふれあい館」は利用させていないというずれ違いが生じていることが分かる。宮里仮設住宅団地で生活する子供たちのための憩いの場を提供し、少しでも仮設住宅の環境整備を応援したいという企業の申し出により、「宮里ふれあい館」が寄贈された。月～金までの午前9時～午後5時までは子育て支援や児童館として利用し、土・日などはイベント会場や集会などに利用されている。このような施設が近くにあるにもかかわらず、有効に活用しないということはとてももったいない。「一緒に遊ぶ友達がいない」「遊ぶ場所がない」などの声が挙げられていることを考えると、「宮里ふれあい館」の児童館としての役割は、十分に発揮されていないようだ。児童館利用の重要性が分かると共に、改善策を考える必要があることを知った。また、子供からのアンケート結果から、ゲームで遊ぶ子供がとても多いことが分かる。冬になれば、より体を動かさなくなることが懸念される。そのようなことも踏まえ、提案をしていく。

コミュニティ調査

「宮里ふれあい館」を訪問し、子供たちがどのような遊びをしているのかを直接見たり、一緒に遊んだりした。それにより、子供たちは児童館の中でブロック遊びやおままごと、本を読む、ゲームをするなど、比較的静かな遊びをしていること、学校で出された宿題をする子供もいること、室内での遊びに飽きると、児童館の外に出て縄跳びや鬼ごっこをしていることなどが分かった。寒くなったり雪が降ってくる時期になると、外で体を動かして遊ぶ機会がより減ってしまうのではないかと感じた。また、数回訪問することで児童館を利用している子供は毎回5人前後、ほぼ同じ顔ぶれであり、幼稚園児から小学4年生くらいまでの学年が多いことがよく分かった。



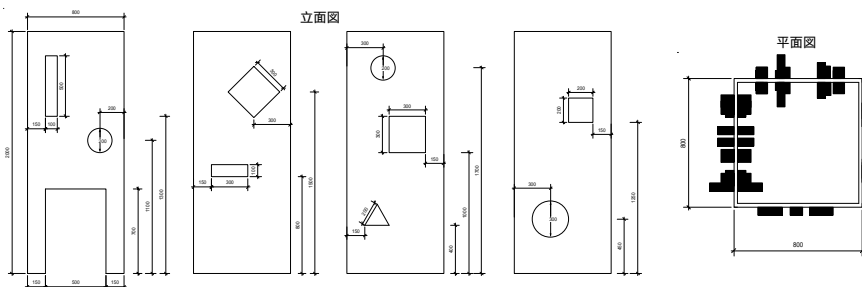
*子供たちと遊んでいる様子

調査のまとめ

今回行った調査を通して、仮設住宅に住む子供たちの生活がよく分かり、子供の遊び場が十分に確保できていない現状が浮き彫りとなった。そして、子供たちは体を使って遊べるような遊具・遊び場を必要としていることも分かった。子供が伸び伸びと遊ぶことができる環境を整えることで、子供たちのストレスを軽減し、保護者の方の子供の遊びに対する不安を少しでも取り除けるような工夫が必要である。

提案

- 概要 「宮里応急仮設住宅団地内にある「宮里ふれあい館」に室内遊具を設置する」
- 遊具の特徴 クライミングウォールを立体的にしたようなもの(手や足を突起に引っ掛けながら落ちないように登る)・冬でも遊ぶことのできる室内遊具・体だけでなく頭も使って遊ぶことができる・「宮里ふれあい館」のシンボルとなるようなもの
- 目的 「宮里ふれあい館」の中でも体を動かして遊ぶことができる・体を動かして遊ぶことで子供たちのストレス軽減に繋がる・体だけではなく、頭も使って遊ぶことで遊びの幅が広げられる・「宮里ふれあい館」の利用者数を増やす
- 遊具の名前 “fun fun tower”



考察

この研究をすることによって、仮設住宅で避難生活をおくる人々に歩み寄りすることができた。そして、「子供」という視点から研究をすすめることで、未来への希望を感じるためには現在の状況を少しでもより良いものにすることが大切であると実感した。現在起きている状況を記録し未来に伝えていくこと、そして被災した人々が抱えている思いを理解し、それらを汲み取って何が出来るかを考えて助け合うことが必要であることも良く分かった。人と人とが歩み寄り、心と心でコミュニケーションをとることが、現在そして未来もより良くすることへの第一歩であると感じた。